小学校高学年以上

黒潮、ゲンだよろしくな

森下　研 作　鴇田　幹 画

黒潮、
ゲンだ　よろしくな
一九八二年五月十日　初版第一刷発行　定価・七八〇円

著　者・森下　研
画　家・鴇田　幹
発行者・相賀徹夫

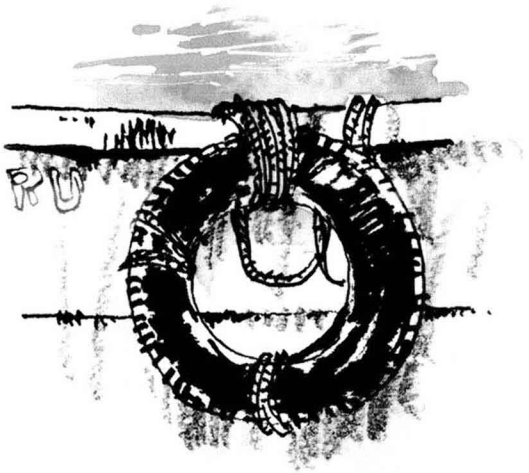
発行所・株式会社　小学館（〒一〇一）
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一
電　話・東京〇三（二三〇）五五四一（編集）
五三三三（製作）　五七三九（販売）
振　替・東京八―二〇〇
印刷所・図書印刷株式会社

＊製本には、じゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。
＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その都度小社宛て許諾を求めてください。

© 1982 SHOGAKUKAN Printed in Japan

黒潮、ゲンだよろしくな

森下研 作
鴇田幹 画



装幀デザイン　中野博之

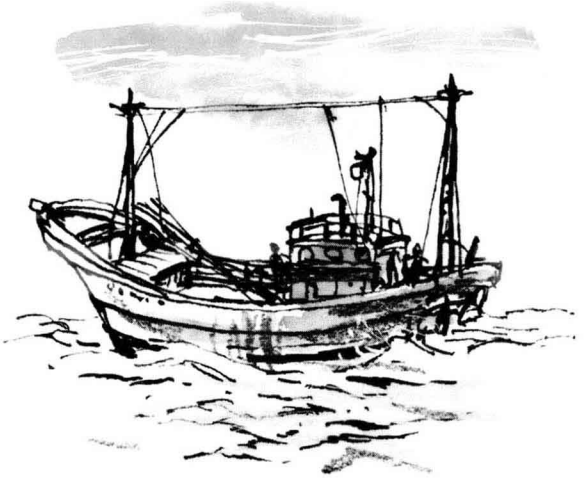
もくじ

黒潮、ゲンだ よろしくな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　ゆれる海峡　8
二　国境の島から　22
三　大黒柱のいない家　32
四　海流のなかへ　41
五　願ほどきの日　54
六　太平洋まで　64
七　横どりされた獲物　75

八　地球の池で　88
九　ツノ事件　98
十　はじけた〝から〟　111
十一　海の山賊たち　120
十二　いま旅だつ　134
あとがき　142



森下　研（もりした　けん）
一九三〇年、福岡県生まれ、九州大学卒業。広告会社勤務をへて、放送作家となる。七〇年ごろから、自分の子どもへの語りかけとして、児童文学の創作を思いたつ。七三年、遠洋マグロ延縄漁船に乗組んだ体験をもとに書きおろした「男たちの海」で児童福祉文化奨励賞を受ける。本シリーズは㉑「さよならイッカク」についで二作目だが、やはり海がテーマ。ほかに作品として「小さな大酋長」「銭五とよばれた男」「蒼い狼の子」など。
現住所／東京都調布市染地三―一
多摩川住宅ロ―八―三〇四

鴇田　幹（ときた　かん）
一九三二年、千葉県に生まれる。五九年から田代光氏に師事、絵を学ぶ。新協美術会委員。白礫会会員。毎年、意欲的に油絵の個展、同人展などを開く。児童文学の作品としては、「北へ行く旅人たち」「広野の旅人たち」「石狩に立つ虹」（以上さしえ）、「まぼろしの城」（絵本）などがある。「さよなら　イッカク」につづいての登場。
現住所／千葉市南生実町八六一

黒潮，ゲンだ よろしくな

森下　研　作
鵜田　幹　画

一　ゆれる海峡

粉雪まじりの北風が、びびゅうと、マストやキャビンの屋根でうなる。船は、ななめ後方からくるうねりをうけて、ともにばあっとしぶきをあげ、右へぐらりとかたむく。

ゲンは、キャビンにうずくまったまま、窓にしがみついていた。

いまでてきた久和の湾にはたいした波はなかったが、ここ対馬海峡はまっ白に変わり、ごうごうととどろいている。

船がひときわ大きなうねりに押しあげられたとき、南の沖に二つの白い影が見えた。

「あそこや！」

ゲンが腰をうかせたとたん、船はがくんとへさきをさげた。はずみに頭が、低い天井にぶ

っつかってごつんと音をたてる。痛さに涙がでたが、ゲンはゆれる船にからだをささえているだけで精いっぱいだ。その背中に、うしろのキャビンの入口から氷のような風がどおっと吹きつける。

だが五郎さんは、ゲンのいることなど忘れたように、両足をふんばり梶棒を操っている。

キャビンの屋根、ブリッジにある無線電話のスピーカーから、父ちゃんの声がひびいた。

「気ぃつけえ戎丸！　横波をくらわんごと！」

その声は緊張で、いつもよりかん高い。

送話器をとった五郎さんが聞いている。

「若潮丸。こっちはええが、福神はどげえな」

「エンジンがいかれちょるけ、動けん。へたをすりゃ、ひっくり返るかもしれんぞ」

「よし。すぐいく！」

ゲンは胸をどきどきさせて、波に見えかくれする二隻の船に目をこらした。

対馬は、玄界灘に浮かぶ島だ。六年生のゲンは、対馬下島の東海岸にある小さな漁村、久和に住んでいる。三十分ほど前のことだ。ゲンは、冷たい風に首をすくめながら学校から帰っていた。真冬の対馬は雪こそめったに積もることはないが、北や西風が強い。きょうも午後になってきゅうに天気がくずれ、粉雪が家々のあいだでうず巻いていた。ゲンがむらなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まできたとき、港へいそぐ五郎さんにばったり会った。

この一月末から三月にかけて海はとくに時化やすいから、人々はあまり漁にでない。だがきょうは、六さんの福神丸が海へいっているという。その福神丸から、突風にやられて水がはいったと無線の連絡があり、ゲンのじいちゃんと父ちゃんが若潮丸でひきにいっている。五郎さんは、そんな話を歩きながらするといった。

――ほいでおれも、湾の口までようすを見にいこう思うちょる。

五郎さんはじいちゃんや父ちゃんの漁仲間で、とても気のいい人だ。子どもがないせいか、ゲンや四年生の妹キヨミをかわいがってくれ、二人が何をいっても笑ってしてくれる。

――おれもつれていって！

ゲンはいつもの調子で無理にたのむと、五郎さんの戎丸に乗せてもらった。ところが港をでるとすぐ若潮丸から、強いむかい風のため一隻だけではひいて帰れそうにもないと、連絡がきたのだ。

ゲンたちの戎丸が、うしろからのうねりにもちあげられるたびに、若潮丸と福神丸はだんだんはっきり見えてきた。二隻はロープでつながり、へさきを北へむけたまま、波の上にかわるがわるはねあがっている。どちらもしぶきの煙に包まれ、赤い船底をむきだしたりするが、ほとんど進んでないようだった。手前の若潮丸は、福神丸や戎丸よりひとまわり大きい

船だ。長さは十メートルをこえ、五トンもあるが、ここから見ると心細いほど小さい。

やがて、若潮丸のともにしゃがんだ黒い合羽姿がはっきりしてきたころ、スピーカーからこんどはじいちゃんの落ちついた声がした。

「戎丸。風下からまわりこんで、ロープを福神に投げてやれ。こっちとそっちでひきゃ、こんぐらいの波ならどうちゅうこたあないぞ」

「了解！」

五郎さんは、戎丸のスピードを落として、若潮丸と福神丸を左に見ながら進めた。

二隻のあいだにのびた太いロープが、波をかぶってぶるんとゆれている。それをすぎ、福神丸のともにかかると、六さんが梶棒から片手をはなしてこちらへあげるのが見えた。

風上の海に目をすえた五郎さんは、うねりがすぎる瞬間、エンジンをぐーんとふかして左へ、とりかじにきった。船は、遠心力で右へかたむきながら福神丸のうしろをよぎり、方向転換する。横波で船体ががくんとゆれ、ゲンはキャビンの壁にたたきつけられた。

五郎さんがどなった。

「ゲン坊。ここにきて舵をとってくれ！」

ゲンは必死にキャビンの口まではいだした。

「ええか。こん梶棒にしがみついて、絶対動かすんじゃないぞ！」

船は、福神丸とならぶ形になっている。

ゲンが梶棒にしがみつくと、五郎さんはそえていた手をはなす。梶棒が、ぐいと動いた。波の力で舵がとられるのだ。ゲンはべたりとすわって、つかんだ手に全身の力をこめた。

五郎さんはそのあいだに、ロープをとものマストにしばりつけ、反対のはしを輪に巻いて身がまえる。波のむこうから、六さんが梶棒を操り福神丸をゆっくり近づけてくる。

両方の距離が五メートルほどになったとき、五郎さんはさっとロープを投げた。が、綱の輪はどおっと吹いた風にあおられ、福神丸の舷側にあたって海に小さなしぶきをあげた。

六さんがにやりとした。

「ボール。コントロールが悪いのう」

すかさず五郎さんが、大声でやり返す。

「いまんは始球式。こんだがプロの仕事よ」

いまにも転覆するかもしれないというのに、二人はまるで楽しんでいるみたいだ。

五郎さんはロープをひきあげ、船のゆれにからだを合わせていたが、すぐにまた輪をとばした。ロープはくるくるほどけながら福神丸のキャビンにあたって、ともに落ちた。ストライクだ。

六さんがすばやく拾って、キャビンの横の舷側に巻きつける。

それをたしかめた五郎さんは、ゲンから梶棒をとるとエンジンの回転をあげた。ロープが波の上にのび、水滴をとばしてぴんとはる。

若潮丸には、梶棒ではなくキャビンのうしろに舵輪がある。その操舵席にじいちゃんがたち、父ちゃんはともで、マストにつないだロープと福神丸を見はっている。

前と横からひっぱられた福神丸のへさきに、高いしぶきがばあっとあがりはじめた。

久和の港は、北の竜ノ崎、南のオキケイ岬にはさまれた、深い湾の奥にある。五十戸ほどのむらは、背後の、三方を山で囲まれたせまい土地にひろがっているが、ゲンの家は、港に流れこむ久和川の川口に近い。

ゲンは、船が岸壁につくのをまちかねて、家へいっさんに走った。海にいるあいだはさほど感じなかったけれど、港へ近づくとともにからだが凍りつくような寒さをおぼえたのだ。

家には母ちゃんもキヨミもいなかった。風で、窓がかたかた鳴っている。

ゲンは、コタツにもぐりこんだ。

いっときしてゲンのからだがやっと暖まったころ、母ちゃんは、じいちゃんや五郎さんと帰ってきた。ゲンは気づかなかったが、港に若潮丸を迎えにいっていたらしい。

「おう、きょうはよう冷えたのう」

じいちゃんが台所からショウチュウの一升びんを手にコタツへくると、五郎さんもどっか

り腰をおろしていった。

「福神は当分、使いもんにゃなるまいが、それにしても六さんはふが悪いぞ。去年は組のもんが羽魚に殺されるしのう」

じいちゃんは、ショウチュウをコップについでひと口のんでから、ゆっくり首をふった。

「みな、無理のしすぎじゃ。むかしゃ誰も秋の彼岸前にゃ羽魚突きはせだったし、きょうのがいな天気にゃ海ぃでだった」

「それはわかっちょるが、無理をせにゃ食えんしのう。年々漁は悪うなるが、去年はひどかった。羽魚もいけだったが、正月前にゃいちばん金になるイカもさっぱり獲れだった。六さんもそれであせったんたい」

羽魚とはカジキのことだ。対馬海峡では毎年九月になると、羽魚突きというカジキの突ん棒漁がはじまる。カジキは春、黒潮の分かれの対馬海流に乗って南の海から対馬海峡や朝鮮海峡を日本海へのぼり、秋風とともに南へ帰る。それを、船のへさきに特別につけたタナから、長いモリで突き獲るのだ。漁はとても勇壮なうえ魚はいい値で売れるので、腕におぼえのある漁師たちは九月をまちかねて海へでる。じいちゃんや父ちゃん、五郎さんも羽魚突きが得意で、ゲンも何度かついていったことがある。六さんは去年、二人の仲間と人よりも早く八月末から漁にでたが、突き手が、モリをうったはずみに心臓マヒをおこしたのだ。

五郎さんも自分のコップに一升びんをかたむけたとき、裏口で風とは違う音がした。
父ちゃんだ。ゲンは首をすくめた。戎丸に乗っていたことを、じいちゃんは知っているのかいないのか何もいわないけれど、父ちゃんはどうだろう。もし見つかっていれば、きっとこっぴどくしかられるにちがいない。
だが父ちゃんは、それどころではない感じだった。漁業組合へよってきたらしく白い伝票をもっていたが、それをコタツの上にほうりだして、どんとすわった。
五郎さんが聞く。
「どうじゃったか、勘定は」
「どもこもないぞ。見てくれ、この金を。こん荒海に、おれどもが命がけで獲った魚が、たったのこんだけでしか売れん」
伝票は、父ちゃんが正月からこっち、じいちゃんと時化の合間をぬって漁をした魚の計算書だった。
「魚は獲れん、値は安い。ふんだりけったりじゃのう」
五郎さんのため息に、台所で母ちゃんが、ソーセージを皿に盛りながらあいづちをうった。
「そんくせ、買うもんは高いしねえ」
それは、父ちゃんや母ちゃんが、いつもこぼしていることだった。久和は対馬でもはずれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com